OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言霊学者・高橋残夢
Author(s)	管, 宗次
Citation	詞林. 1990, 7, p. 54-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67286
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言霊学者・高橋残夢

菅　宗次

一、はじめに

高橋残夢は、香川景樹門の歌人として屈指の存在であるが、独自の学を展開した言霊学者でもある。

幕末期は、言霊学者が数多く輩出し、それぞれに説を立てて、独自な論を述べているが、残夢は、当時としては科学的な方法によって言語の一字一義の解体と再構築を試みており、その方法手段における徹底ぶりと、矛盾や曖昧さを極力排除しようとした学問的態度には驚くべきものがある。しかし、あまりにも徹底した細分化と構成による独自性をもった研究のため、その学統は存続せず、また、高橋家の経済的支援者であった大阪の豪商・山片家などが幕府瓦解後の藩債処分で倒れ、経済的基盤と優秀な門人を同時に失うといった不運が残夢の研究成果をも埋もれさせてしまった。

本稿では、残夢の門人であり、残夢の言霊研究にも深くかかわった山片重信旧蔵書を中心に、高橋残夢について述べるものとしたい。

二、高橋残夢について

高橋残夢について、桂園派歌人として取りあげた本は多く、『国学者伝記集成』・『慶長以来国学者史伝』・『岡山県人物伝』・木村三太郎著『浪華の歌人』（昭和十八年四月三十日刊）・福井久蔵著『幕末の歌人』（昭和二十年四月十日刊）・兼清正徳著『熊谷直好伝』（昭和四十年五月二十日刊）・兼清正徳著『木下幸文伝の研究』（昭和四十九年三月三十一日刊）などがある。

高橋残夢、残夢の号は、文政十二年十月十八日に剃髪して名を改めた時のもので浄土宗を奉信していたようである。高橋残夢の実父は平松正春といい、備中上房郡松山出身の富豪で、残夢の生れた頃は京都室町頭柳原南町金龍水の傍に住んでいた。平松正春も文雅を好み、有栖宮職仁親王や富士谷成章に和歌を

学んでいる。幼少の頃より豊かな財力によって醸しだされた文雅の環境と京都という地にあっての影響は後々まで少なからぬものがあった。

残夢の通称は元右衛門、名は初め正徴・正澄、後に残夢、号を清園・有所遊居（この号は後に門人の井上喜厚に譲られた）、室号を塵室・心月洞と号す。享年八十七と七十七の二説あるが、正宗敦夫説の七十七が妥当かと思われる（『国学者伝記集成』一二七二頁）。よって安永四年生まれ、嘉永四年二月二十七日没、享年七十七。

京都に生まれた残夢であるが、天明の大火に住居も類焼し、天明八年に郷里に帰っている。そして、備中小田郡笠岡の庄屋・高橋美啓の養子となり、妻は同じ笠岡の丸山久右衛門の娘である栄子（はえこ）を娶っている。笠岡は、もと天領で名家の五人の宿老がおり、その一人に高橋残夢もあったが、後に笠岡が播州龍野侯領となると争論がおこり、龍野にも赴いている。さらに、親戚の丸山某のために領主に讒言されるに及び、ついに家産を没収という不運に遭う。

文政五年十月十一日に笠岡を去り、残夢は出生地でもあり、ゆかりのある京都に行こうとしたが、大阪では同じ桂園派の木下幸文が文政四年十一月二日に亮々舎で没しており、桂園派の宗匠を失っていたため、門生が数多く残る大阪に門戸を開き、和歌宗匠として立つこととなった。

香川景樹への残夢入門の時期であるが、木村三太郎著『浪華の歌人』（一一九頁）に「景樹門人録には文政十三年正月一八日入門とあるから、大阪にきたのちで、即ち晩年のことである」とあるが、これは誤りで、「桂園入門名簿」（『国学者伝記集成』（一〇八八頁））には、

文政十三庚寅年正月ヨリ（即天保元年）

正月十八日　大坂　高橋熊彦　正純

とあって、これは、残夢の息子・高橋熊彦（正純）の入門の記事である。残夢の景樹への入門は文化十年で、まだ笠岡にある頃であるが、木下幸文・菅沼斐雄とも深い交流があり、既にかなり名の知られた存在であった。また、桂門となる前は、京都の梨木三位鴨祐為に和歌を学んでいた。

大阪では、はじめ難波小橋納屋町・立売堀に住み、晩年は大川町浮世小路に住んだ。大阪では経済力のある門人が数多くあって、著述上梓や歌会運営に尽力するばかりでなく、歌学・言霊研究にも助力している。残夢の容貌は目が丸く大きく、性格が偏屈頑固であったという。大川町浮世小路で没した残夢は大阪天満寺町浄土宗専念寺に埋られた。戒名を清誉正澄泉斎居士、墓石は「南無阿弥陀仏」「高橋氏」とあるのみで、専念寺過去帳（『国学者伝記集成』（一二七六頁））には、残夢の葬式の様が記されている。次にあげる。

四役伴　一　侍　二　徒士　三　長力　一

押　一　先箱　三　後伴　九

頼寺遠方に付き一札請取置事

「頼寺……」は、残夢の高橋家壇那寺が遠地の笠岡であるため、専念寺の壇家に改めるのに人別帳を必要とする一札である。

らしい。残夢の妻の栄子（はえこ）は、安政四年十月四日没、享年は七十一である。残夢は晩年に眼を病み、失明したため、短冊に「残夢さぐり書き」といわれるものがあり、盲目のため、二行がそれぞれ左右に片寄り、残夢の指紋が墨付きになっていたりして珍短冊とされている。また橘千蔭と残夢は遠戚で親しい間柄であった。残夢は算・茶・謡をもよくしたと伝えられる。

三、井上家と高橋残夢

高橋残夢の大阪での門人は豪商が多く、経済的支援者でもあり、学問的協力者でもあった。なかでも山片家と井上家の力は抜群のものがあった。

井上家は三世五人にもわたって、高橋残夢・正純の父子に入門しており、井上喜厚が残夢の別号である有所遊居の号を譲られたことは前述した。井上家の当主は次の如くである。

井上家

喜尚（よしなお）―喜厚（よしあつ）―喜復（よしなお）

（付・善尚、善復として「喜」を「善」とするのは誤り）

井上喜尚は、残夢歌集『麋室草露』（天保十四年序文刊）に、序文を寄せており、同歌集は、笠岡にあって大阪に出るまでの歌稿をまとめたものである。序文は残夢の伝記資料ともなるもので、同書巻頭三丁にも及ぶもので、井上家の姓が大江であることが判明し、板下は井上喜尚の自筆板下である。次に全文を翻字してあげる。

吾清園大人は吉備の松山に平松正春といひし人の茶道を好て世を都に逢れて金龍水舎にこもりしほとにうめる子也いにし天明の八とせまかつひの神のつひは都残りなく焼失ぬれは松山にくたりて後おなし国なる笠岡の浦人に高橋美啓か家をつきて正澄となんいへりけるおほやけもわたくしもことしけかりし身におはしけれと皇国に生れたらんものゝ歌しらさらんはむけに口をしき事なりとて春柳の露のいとまえて花の陰に遊ひては聞やすからぬ風の音をなけきあるは山寺に遊ひては若葉のかけにほとゝきすを待世をのかれんのおもひを心の底にすめ置て蓬生の露に更たる月をなかめねられさりけん夜風のはてに雪をたのしひ給ひけんなとはいふもさら也ものにふれことにつきて家にも旅にもおのか上人の上哀と見聞給へるときは必うたひ出ておもひをやり給へりける歌多かりけるをこの浪速にのほり来給ひては只一筋に月花に遊ひて身も心もすか〳〵しとて家を清園（スカソノ）と号け題おろして名を残夢とよはせていとしつかなるいとま片糸のより〳〵にあつめ置てうき世の塵に交りし跡の言の葉なれはとて麋室草露と題して人しれす古郷に有つるほとのとしなみのなこりとなんしのひ給へりけるを今はよはひも七十にみつの浦わの有明の月いつまてか世にのこりてはかなき夢はみるへきなからん後

のかたみにもとよわれしぬふらん古郷人にもみせよとてみつから写し出て見せ給へるをおもふとちはかり合せて板にゑらせしはうつし取なんにあやまちあらんことをおもひてなり

天保十四年五月十日　門人大江喜尚しるす

勿論、『塵室草露』を上梓するのには、井上家・山片家の財力によるところが頗る大きかったわけである。また、雅文における力量も、この序文から察せられよう。

井上喜厚の和歌については、架蔵の短冊を次にあげる。

有し世を偲ふときくか悲しくて
わか躰にもかゝるつゆかな　喜厚

短冊の裏面には、「井上市兵衛」と墨書がある。

次の代にあたる井上喜復も歌人として知られており、広島の人、吉田健次（号を報春亭）の歌集『石竹集』（和装活版本・明治三十年三月一日序刊）に序文を寄せている。次にあげる（住吉大社御文庫蔵本）。

報春亭吉田健次翁法名浮雲ともいひてことし七十の春をむかへて年頃の歌あまたあるか中よりみつからこれこそはと思ひみられたるをえり集めて一巻とし石竹集と名つけられぬ翁はもと広島藩士にて若かりしより此道に心さし深く公務のいとまあることにおもふ心をいひのへられしか同し藩なる安井正秋とおのか亡父の喜厚との紹介にて清園残夢大人の門にはあそはれし也かくて年月を経て維新廃藩の世々変りゆくまゝに師の家も絶て多かりし友垣もおのかしゝ離れ〳〵と成ぬれと心さしを槎すひたすら此道に思ひふかめて初学の人々をつとへ親しく訪ひ疎くとはぬにかゝはらておなしさまにものせられたるその篤実なる師のをしへをまもりて時にうつらす世に衒はぬ真こゝろは言葉の玉のひかりにあらはれていとたふとくもえかたき事になむありける此巻も世にひろめむの心にはあらてみつから老のなくさみに書あつめられたるをこたひ古稀の賀のしるしに親しき人々にわかちあたへむとてのすさひなりけり翁いへらくまたの号を瞿麦園といへはおのれ齢ひこそたかけれ歌のさま稚に敷は撫子こそふさはしからめされと瞿麦集といはむはあまりうちつけなりとて巻の名は石竹となむなつけこれたりけるおのか家は代々浅野侯の事をきゝつに喜厚とは浅からぬ此みちの交りもあれはおのれに此巻のはしめに一ことをそへよといはるゝにいなみかたくてはしかきにかへてかくはものしつ猶書あつめらるゝことの葉のつもらむ千代の後に真の序はものする人のあらむかし

明治三十年三月一日　む蔵の寓居にて　井上喜復

同序文は、井上喜復自筆板下と思われる、本文は活版。

井上喜復は高橋残夢の著書類をまとめて蔵しており、亀田次郎・正宗敦夫らが調査した時には「清園全集」としてまとめられていたようであるが、後に静嘉堂文庫に納められたものが、それにあたるようである。

四、山片家と高橋残夢

蘭癖として知られた山片重芳と、その番頭にして著書『夢の代』で知られる山片蟠桃と、好学の山片家であるが、山片平右衛門家当主六代目にあたる山片重信が和歌に専心し、七代目重中、八代目重明の三代にわたって和歌に心を寄せることとなる。九代目の重忠に至るまで、大阪船場豪商の上品で趣味の良い環境と家庭内の好学の雰囲気は代々に文雅人、町人学者を育てていった好例とも典型ともいえるのが山片家であろう。

あまり触れられていないが、幕府瓦解の後、八代目重明の時に山片家は朝敵仙台藩の負債で倒れた。その子九代目重忠も文雅執筆を好み、没後に遺稿集として、『片っ端から』第一巻（迷舟遺稿集第一巻）（昭和六年十一月五日刊・故山片平右衛門著・兵庫県御影山片重次発行・非売品）、『片っ端から』第二巻（迷舟遺稿集第二巻）（昭和七年七月拾日刊・故山片平右衛門著・兵庫御影山片重次発行・非売品）の二巻が上梓されている。しかし、明治期になってからの山片家は悲惨な状態で、山片重忠は「自分は生まれた時、既に家業は亡んで祖先伝来の住宅を去らねばならなかった。我家の傾運は幼少ながらに、家族は月々に少なくなり、移転の度に小さな住居に変はるのが悲しかった。その上自分は少時からの病身で、親戚に寄舎したり、父と一緒に流浪したり、漂泊の生活で成人したので修学も出来ず職業も覚えなかったので、唯祖先の栄華を伝聞して身の薄幸を泣くばかりである」（『片っ端から』第一巻・序言一頁）と辛酸をなめたのであった。

山片重信については、その歌集『楸子園草稿』一冊（架蔵）があり、その全文を既に拙稿にて翻字紹介している（「山片重信歌集『楸子園草稿』について（一）・（二）〈翻刻・解題〉」（「混沌」第十二号・第十三号、昭和六十三年十月十六日刊・平成元年七月十六日刊、混沌会、中尾松泉堂発行）が、その伝記について略述する。山片重信は四代目重芳の子で、山片家は重信の兄である重長が五代目を嗣いだが、その兄（重長）が文政十三年に三十歳の若さで没したため、六代目として山片家当主となった。号を楸子園、安政元年没、享年四十八。懐徳堂とも、深く関わりがあったことは、『樺帖』（大阪府立中之島図書館蔵）の巻末識語の、

くわいとく堂そう書をもつてうつしおへぬ
弘化五戊申きさらき二十五日　しけのふ

で知られており（「第一〇三回特別展　懐徳堂―近世大阪の学校―」昭和六十一年三月十一日～四月十七日、大阪市立博物館）、号の楸子園にも、その影響がみられる。

『楸子園草稿』より、数首抜粋する（番号は、拙稿・「山片重信歌集『楸子園草稿』について（一）・（二）」に私に振ったものである。

鶯出谷
みよし野のやまのした雪とけぬらし

谷より出る鶯の声　（四）

十五夜の月毛馬の渡まて井上喜厚ぬしに
したかひてまかりける歌の中に
今宵こそ秋のとなりの空ならめ
くまなく月もさやか成かな　（一九〇）

高橋ぬしのなき師に花奉りて
世にまさはなくさぬましをいかにせん
今は手向の花となしつる　（五五三）

四水館にて
くれて行秋吹かせはをさまりて
静にみゆるはし紅葉哉　（八四四）

山片重中も数多くの和歌を詠んでおり、現在、山片家当主・山片重治氏蔵の短冊には、重信・重中・重明の短冊が他の歌友や師の高橋残夢・正純父子の短冊と共に存している。それらについては、「混沌」十四号に「山片家の歌人山片重信―和歌短冊・山片重中和歌短冊」と題して、解題を施し翻字の予定である。

山片家にも少なからぬ高橋残夢・正純父子の著書が残されていたが、その中心をなすものは、現在、愛日小学校（平成二年三月統合閉校）の愛日文庫に納められている。従来、山片家旧蔵本で愛日文庫に存するものは、『ヨンストン動物学全書』・伊達侯拝領本『環海異聞』・山片重芳筆写本『瓢流記』・『訂正増訳采覧異言』などの蘭学関係、また、中井竹山筆『蒙養篇』・山片蟠桃旧蔵『近代公実厳秘録』・懐徳堂本『大日本史』などの懐徳堂関係の蔵書について紹介、論じられてきたが、残夢関係の貴重な書籍も少なくない。他にも、山片家での、和歌・国文関係の蔵書は、より豊かなものであったか、と思われる。また、末中哲夫博士は、山片重芳筆「書物目録」を紹介されたなかで「本目録は大体において文化二年に書かれ、以後追記されて行き、文化末年の入手で擱筆されてしまっている」「この目録で注意すべきは儒学・国学の書が少ないことである」（末中哲夫著『山片蟠桃の研究「夢の代」篇』（昭和四十六年三月三十一日刊、清文堂書店）とされて、山片家蔵書目録にあたる「書物目録」が、四代目重芳の代のものであり、これらに関しては、山片蟠桃が全て見る機会があったともされている。よって、この「書物目録」には、残夢著述は一冊も所載されないことになる。因みに、「書物目録」に所載のものの一部は散佚しており、同目録所載の一本にあたる尾崎雅嘉著『群書一覧』薄葉三冊（特装）（「思貽堂図書記」の蔵印を紙帙に貼付）を偶然にも、中野真作先生の御高配により、東京の古書肆より入手することを得た。山片重芳旧蔵『群書一覧』は、拙著『群書一覧研究』（一九八九年六月三十日刊、和泉書院）の「（四）

諸本書誌」の「一七（22）天理図書館蔵本」と同じ板で、山片家旧蔵本は書林発売の折の紙製元帙に納められている。

よって、山片家旧蔵のうち、愛日文庫に寄贈されたもののなかからしか、残夢の著述は見出せないが、近年に京都思文閣から売り出されたものに、残夢著述があり、おそらく山片家旧蔵と思われるものがある。架蔵の書入れ本『麋室草露』（板本）も、その一点であり、現在、大阪府立中之島図書館蔵本となっている『柿の下葉』・『窓の霧』は中尾松泉堂（「古典目録」昭和五十六年十一月）から納められたもので、これなどは明らかに山片家旧蔵であった高橋正純とその社中の歌集である。

愛日文庫に存する残夢著述にまじり、山片重信の編著『三代廼菜』五冊がある。『三代廼菜』は、高橋残夢の研究方法を学んだ重信が、古典たる古今集・後撰集・拾遺集から類によって例示を抽出し、帰納的に配列した方法で、仮字の軽重によってわけて、字音別に和歌を並べている。仮字の軽重というのは、高橋残夢の音配列の図「真洲鏡之図」（ますかがみのず）」によるもので、「真洲鏡之図」は、残夢の言霊研究の根幹をなすもの、残夢独自の図である（後述する）。カード式の小札に書いたものを整理して加えていったもののらしく、空欄もみえ、度々の書入れ、朱墨二色の補訂がみられる。奥書もみえており、次にあげる。

天保元庚子水無月集之　重信

また、重信は、残夢の遺詠を上梓した『心月詞花帖』（弘化二年八月刊、売弘所大阪唐物町四丁目河内屋記一兵衛）に序文（自筆板下）を寄せている。それによると、天保十四年に上梓した『麋室草露』が出来るついで、と友だち（井上喜尚のことであろう）と謀り、これも上梓することになったという。やはり、出版の大きな援助者であったのであろう。序文には「天保十四年冬霜月　平重信しるす」とある。

五、高橋残夢の和歌

歌人としても知られた井上通泰は『南天荘歌話』（大正十五年六月十日刊、日本古典全集刊行会）に、残夢の和歌を評して、次のように述べている。（濁点は原文による）

今はまづ此集（『麋室草露』）を評せんにさすが桂園門下の四天王の一人と云はれた人の集だけあつてよろしき歌がすくなくない。其中でも殊によろしと覚ゆるは

庭梅

うぐひすの来ぬまうかがひ立出でて
垣根の梅の花をみる哉

みるが岡なるいなりの社にて
いなり山あまたささぐる燈火に
ふる春雨も見ゆるよはかな

と、高く評価している。井上通泰は桂園派の流れを尊ぶためもあろうが、充分秀歌といえるものをあげている。桂園派屈指と

いって間違いのない歌人であろう。

残夢の和歌には、題詠で、梅を詠みこんだもので秀歌が多く、それは山片重信にも通ずることである。

興味深いのは、香川景樹が残夢の壮年期かと思われる頃に与えた注意が、そのまま残夢の歌風や学風をよく言い得ていることである。それは『随所師説（一名を詠草奥書）』（『続日本歌学全書』第五編・香川景樹翁全集下巻、明治三十一年八月七日刊、博文館）にみえる、「〇備中高橋正澄が詠草に」「〇同じ人の詠草に」「〇又同じ人に」（一～十三頁）の文中に、

御歌力入り過ぎたる方侍るべし。今少しさら〳〵と有たくや。（「〇備中人高橋正澄が詠草に」）

点もらしたる御歌、みな聊かの事にて、是をそれとさすばかりも侍らぬ也。つと〳〵書きつけ侍らば、またいはれざるにも侍らねど、労かはしくも侍り。又それ申し侍りしとて、さる甲斐あるものにも侍らず。唯大やう処を、今少しのみこみ給はゞと思ひ侍り。とかく歌といふものに、からめられたる所はなれ侍らず。聊かも巧む意侍りては、よき歌はなきもの也といふ事をさとるが、此道の至りに侍るべし。（「〇同じ人の詠草に」）

源語枕草子などによるは、あらぬ事也。……（中略）歌も文も古歌古文を捨て、我歌我文を書き給ふべし。自然古歌古文に似るもの出来ぬべし。されど其古歌古文に似るを願ふにあらず。近世古歌をみると歌をよむと同じ心得に惑ひきたるより、古の跡をみるの学侍る也。爰に至りては、已達の高評も聊か謬れるふしなきに侍らねば、その論ひくさ〴〵煩らはしく侍るのみ、まのあたり一喝申し入れ侍らば、氷の如く打とけ侍るべしと覚え侍り。（「〇又同じ人に」）

とある。残夢の和歌は理知的で緻密、やや技巧的であるが、晩年に至っては、柔らかな情感のものへと歌風が移っていくようである。架蔵短冊より、三首あげる。

待花

鶯のもよほされてもいそかぬは
のとけき花のこゝろ也けり　正澄

野亭女郎花

をみなめしいかなるこひに世をすてゝ
さかのゝほのあきにさくらん　正澄

早春風

梅か香も今日は吏りて青柳の
まよふ物なき春風そ吹　残夢

木村三太郎著『浪華の歌人』にも指摘があるが、残夢歌集を一覧して気付くことは、「かな」「けるかな」の、いわゆる桂園調が多いことである。『浪華の歌人』にあげるところの秀歌を抜抄する（濁点は本文のまま）。

春水

山のはのかすむばかりぞにごりける
雪とけゆくかたにがはのみづ

梅
はるの夜のねざめに匂ふうめがかの
行へや夢の行へなるらん

湊月
舟人のうきねふけたるみなとえに
秋風みえてゆらぐ月かな

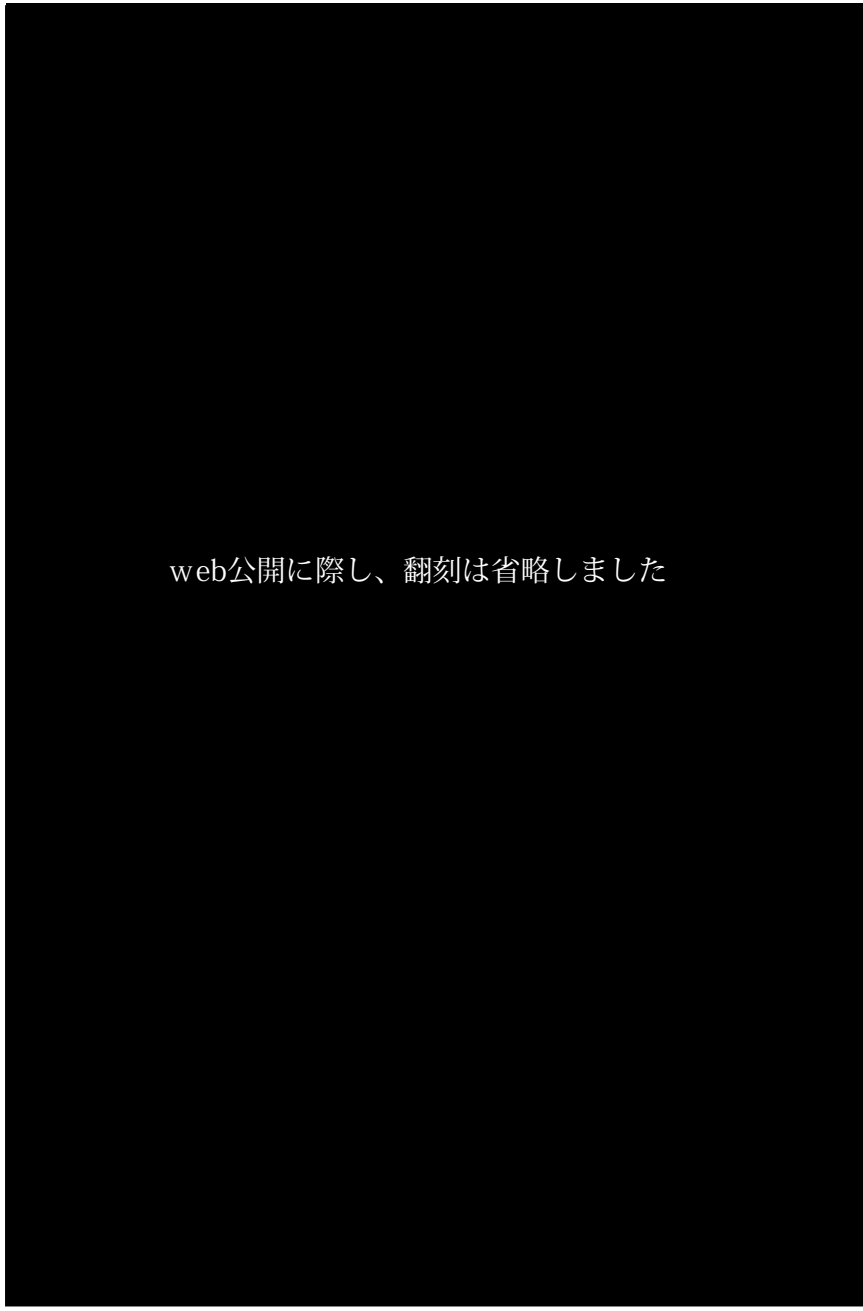
六、高橋残夢の言霊

残夢の言霊、言語観を最もよく表わしているのは、天保十四年七月成立の『国語本義』十五巻十五冊での巻頭「国語本義惣論」である。ここで用いるのは、愛日文庫本で、次の奥書を有している。

天保十四歳七月注し終りぬ　清園残夢
弘化元年十二月二十五日書写卒　正純
弘化二年葉月十日臨写　（重信花押）

残夢の言霊研究は名高いが、紹介翻字されたものもほとんどなく、言語哲学ともいうべきもので、その一部を述べるには全部をあげねば言い尽くせぬの観がある。やや長いが、『国語本義』にあげる「国語本義惣論」の全文を次に翻字してあげる。

web公開に際し、翻刻は省略しました


web公開に際し、翻刻は省略しました

残夢のいう「真洲鏡之図」は図版にてあげる。残夢は、音義説の立場から、文字から訓義を説く学説の非を論じており、音義によって日本語音を清濁の七十五音の図に構成している。

また、注目すべきは、数多くの言霊学者が、諸外国の言語が不純不正で、日本語より劣れることを強調するなかで、言霊は日本語固有のものではなく、中国語・梵語にもあると述べつつ、残夢自ら意欲的に中国語音韻研究に没頭していたことである。言霊は、諸言語にあるとの認識の上で、言語にある言霊は、万国共通の普遍的真理を知らしむるものであると断言する。言霊学者と呼ばれる学者たちの多くが、皇国中心の思想と表裏一体の言霊観で、唯一の言霊言語として、日本語を称揚するのとは、基本的観点が大きく相違している。

具体的な音義の説として、やはり音義説の言霊学者・渡辺弘一の著書『助辞音義考』（架蔵本・文久二年門人柴田顕光自筆写本）と比してみたい。

高橋残夢著『国語言霊辨明』八巻八冊（愛日文庫本）

「やよゆえゑ／わを／あおうゑい」の部一冊の四五丁

やは。あわやと。三声重なれるの初（はじめ）。りより。あと飛走（とびはし）りて生れし声。ややをの三ッ韻ッ中（なか）にあり。物中（ものなか）にあれば。必疑（うたがふ）の意（こゝろ）生ず。日光あと顕れ。やと形（かたち）を定めしかして後（のち）。西へ行（ゆく）。其ゆく事矢のごとし。世其中にあり。朝に東に出て。夕に西に入。かくして一年ッ三百六十余日重（かさなる）。是やの韻ッ味也されは。やは意のうへ。物のうへ。事のうへ。何のうへにも。意を飛走らせて云か。又は。重るの意を含みていへるか。又は。中にあるの義によりていへるか。又は。疑意をいへるかの四韻ッ也。此声手尓波声也発語にいへるもあり

渡辺弘一著『助辞音義考』一巻一冊（架蔵本）十六丁裏

ヤの音はユアの音より分出たる音にてあやしむ象あり（あやしむ象は母のア韻第五等の義）故ヤの音以て名付たる物に其意あり闇（ヤミ）病（ヤム）綾（アヤ）奇（アヤ）阿夜加流（アヤカル）禍津日（アヤツヒノ）神等のヤ然也されば辞のヤも此意にて疑の意となる又歎息の辞のヤも母のアの韻の象によれり（省略）

共に音義説ではあるが、残夢の緻密な分析と構築によることと、文字によらず音に徹底するところに学問の方法と態度がよく表われている。既に福井久蔵著『幕末の歌人』（昭和二十年四月十日刊・研究社）に指摘のあるところでもあるが、「古典の研究に筆を染め、類により帰納的に集めることに努力した。これは富士谷家の学から導かれたもの」とされている。門人と問答形態をとって残夢の言霊研究を述べていく『顧山居問答』六巻六冊（愛日文庫本）には、山片家蔵本の古今集・後撰集・新古今集・源氏物語を用いての異本校合をしたものが例示傍証の和歌としてあげられており、引用する証歌にも丹念な注意が払わ

れていることが判明する。また、その研究には、山片家蔵本（惜しむらく所在不明であるが、おそらく異本の善本かと思われる）が供され、山片重信の助力も少なからぬものがあったかと思われる。

「真洲鏡之図」は、母音と父音の構成に伝統的な音義説の音図を念頭にいれつつ、大胆に細分化、再構成しており、残夢の言霊研究の中心ともいえるもので、残夢の著述も、山片重信著『三代廼芽』も、この七十五音の順に配列されるのである。本稿に取りあげたものも含め、山片家旧蔵の高橋残夢著述と山片家旧蔵国文関係本については、『愛日小学校総誌「愛日」』（平成二年三月二十四日刊・愛日小学校を讃える会事業委員会発行）所載の拙稿「「愛日文庫」の国文関係蔵書」に、解題と共に述べることとする。

〈付記〉本稿を成すにあたり、中尾堅一郎氏・末中哲夫先生・山片重治氏・山片田鶴子氏には、資料閲覧に御高配賜わり、「詞林」に掲載の機を賜わったこと篤く御礼申しあげる。

「真洲鏡之図」（『国語本義』愛日文庫本）

web公開に際し、
画像は省略しました